

白居易における詩集四分類についての一考察：特に 閑適詩・感傷詩の分岐点をめぐって

静永, 健
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9699>

出版情報：中国文学論集. 20, pp.21-44, 1991-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

白居易における詩集四分類についての一考察

——特に閑適詩・感傷詩の分岐点をめぐって——

静 永 健

白居易の詩文集、即ち『白氏文集』（現存七十一卷¹）は、一体どのようにして成立していったものであろうか。このことは、単に書誌的分野の議論に留まらず、白居易の文学そのものを考える上でも極めて重要な關鍵となる問題である。

それには二つ理由が存する。まず一つは、その『白氏文集』が、まぎれもなく白居易自らの編定に依るものだということである。しかも彼は、その七十四年の生涯（七七二～八四六）に於いて、自ら幾度もその作業を繰り返している。

- | | | | |
|----------------|-----------|-----|-----|
| (1) 『詩集』十五卷 | 元和十年（八一五） | 四四歳 | 在江州 |
| (2) 『白氏長慶集』五十卷 | 長慶四年（八二四） | 五三歳 | 在洛陽 |
| (3) 『白氏後集』五卷 | 太和二年（八二八） | 五七歳 | 在長安 |
| (4) 『白氏文集』六十卷 | 太和九年（八三五） | 六四歳 | 在洛陽 |
| (5) 『白氏文集』六十五卷 | 開成元年（八三六） | 六五歳 | 在洛陽 |
| (6) 『白氏文集』六十七卷 | 開成四年（八三九） | 六八歳 | 在洛陽 |
| (7) 『白氏洛中集』十卷 | 開成五年（八四〇） | 六九歳 | 在洛陽 |

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

(8) 『白氏文集』七十卷 会昌二年(八四二) 七一歳 在洛陽
(9) 『白氏文集』七十五卷 会昌五年(八四五) 七四歳 在洛陽

これらは、現在明らかにされているところの白居易の自家詩文集編纂の実例である。⁽²⁾ 彼は、自らの手で、自らの作品を取捨選択し、特にその後半生に於いては、執拗なまでに自家文集の編纂に精力を傾注したのであった。

また、理由の第二は、その詩集の部分に関して、彼は、自己の詩歌を、他に類例を見ない非常に特異な方法に拠って分類しているということである。

これは白氏五三歳以前の詩集、即ち、先掲の(1)『詩集』十五卷、および(2)『白氏長慶集』五十卷(うち詩集は二十卷)の時点に見えるものであるが、つまり彼は、そこに収める一三九六首⁽³⁾の詩歌を、以下の如く四つの項目に分類しているのである。

諷諭詩：古体詩一二二首(巻一・巻二)・新樂府五十首(巻三・巻四)

閑適詩：古体詩二一六首(巻五)巻八)

感傷詩：古体詩一八六首(巻九)巻十一)・歌行曲引雜言二十九首(巻十二)

雜律詩：今体詩七九三首(巻一三)二十)

詩歌の分類ということに関しては、古くは『詩経』に風・雅・頌の三分類があり、また『文選』に遊覧・詠懷・贈答・行旅等、詩の題材および用途に拠る二十三項目に及ぶ分類がある。しかし、この『白氏長慶集』詩集二十巻に於いて特異であるのは、それらが詩の題材からの区別ではなく、諷諭・閑適・感傷という、純然たる詩の内容、或はその主旋律をなす感情に於いて分けられている点である。これらの分類方法は、恐らく白氏自身によって考案され実行されたものであろうが、とすれば、白氏詩集に存するかかる四分類の考察は、彼の文学理論および文学創作のあり方を探る上で正に忽視できない重要な位置を占めるものとなる筈である。

そこでまず本稿では、表題にも示した如く、『白氏文集』をめぐる後者の問題、即ち、その詩集に見られる諷諭・閑適・感傷・雜律の四分類について、その成立と意味内容を考究しようとするものである。白居易は何故このような四分類を考え付いたのか。また、そこには如何なる意味が込められているのか。かかる点につき、以下些かの

検討を加えたいと思うのである。

ただし、この四分類に関しては、既に多くの研究者による言及があり、中でも近年、次の五氏によって詳細な論考が提出されたところである。

○ 西村富美子「白居易の閑適詩について——下邳退居時——」

○ 古田教授退官記念中国文学語学論集』一九八五東方書店

○ 高木 重俊「白居易の閑適詩」東書国語二七三号・一九八七、六月

○ 同 「白居易『元九に与うる書』——『諷諭詩』と『閑適詩』——」

伊藤虎丸・横山伊勢雄編『中国の文学論』一九八七汲古書院

○ 下定 雅弘「白居易の閑適詩——その理論と変容——」

○ 鹿兒島大学法文学部紀要人文学科論集二五号・一九八七、三月

○ 同 「白居易詩の転形期——江州時代から杭州時代へ——」

同右二六号・一九八七、十月

○ 同 「白居易の感傷詩」

帝塚山学院大学研究論集二四集・一九八九、十二月

○ 成田 静香「『白氏長慶集』の四分類の成立とその意味」

集刊東洋学六一号・一九八九、五月

○ 川合 康三「白居易閑適詩攷」未名九号・一九九一、三月

従って本稿の論述も、従来の研究、就中、上掲五氏の説に啓発され導かれるところ少なくない。ここに記して敬意を表し、非礼にわたる点あらばと、予め寛恕を乞う次第である。

*

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

四分類の解釈について、従来の研究および上掲五氏の論考がそれぞれにその最も基礎としておられる資料は、次に挙げる「與元九書」（元和十年・一四八六、在江州）中の一節である。

僕數月より來、囊秩中を檢討し、新舊の詩を得、各々類を以て分かち、分かちて卷目と爲す。拾遺より來、凡そ遇ふ所感ずる所、美刺與比に關する者、又武徳より元和に訖る、事に因りて題を立て、題して新樂府と爲せる者、共に一百五十首、之れを諷諭詩と謂ふ。又或は公より退きて獨り處り、或は病を移けて閑居し、足るを知り和を保ち、情性を吟翫せし者、一百首、之れを閑適詩と謂ふ。又事物の外に牽かれ、情理の内に動き、感遇に隨ひて歎詠に形るる者、一百首有り、之れを感傷詩と謂ふ。又五言七言、長句絶句の、一百韻より兩韻に至る者、四百餘首有り、之れを雜律詩と謂ふ。凡て十五卷と爲し、約八百首。

即ち、白居易は、左拾遺拜命以後、美刺與比に關する詩歌を「諷諭」とし、また、公務の餘暇等に己が自由自適の性情を説く作品を「閑適」とし、外的な事象に衝き動かされ、一時の感興に隨つて詠み綴つたものを「感傷」として分類し、以下、残る五言七言の今体詩（律詩・絶句）を「雜律」として分類したと自ら規定しているのである。また、この四分類には自ずと等級があつた。再び「與元九書」に曰く、

古人云ふ、窮すれば即ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を濟ふ、と。……故に僕が志は兼濟に在り、行は獨善に在り。奉じて之れを始終すれば、則ち道と爲り、言ひて之れを發明すれば、則ち詩と爲る。

之れを諷諭詩と謂ふは、兼濟の志なり。之れを閑適詩と謂ふは、獨善の義なり。故に僕が詩を覽るは、僕の道を知るなり焉。其餘の雜律詩は、或は一時一物に誘はれ、一笑一吟に發し、率然として章を成せるなれば、平生の尚ぶ所の者に非ず。但だ親朋合散の際を以て、其の恨みを釋き權びを佐くるに取る。今銓次の間に、未だ刪去する能はざるも、他時我が爲に斯文を編集する者有らば、之れを略するも可なり。

即ち、兼濟・獨善という孟子の思想に根柢を求めつつ、諷諭詩を兼濟の志を述べたもの、また、閑適詩を獨善の義を具現したものととして二者を上位に置き、其餘の感傷・雜律詩を取るに足らぬものとして下位に退けたのである。

ところで、この書簡は元和十年（八一五）白居易江州司馬左遷中にしたためられたものである。先掲の如く、こ

の時、白氏は自己の作品をはじめて十五巻の詩集として編纂し、同時にこの四分類を導入したのであった。従つて、この書簡文中に見える詩集四分類についての説明は、第一に、白氏自身が語つたものであること、第二に、この詩集十五巻が編まれて間もない頃のものであること、そして第三には、かかる発言の相手が白氏の親友元頼であること等を理由として、極めて信憑性の高いものと考えられる。上掲五氏を含む従来の所説も、概ねかかる観点から、全てこの「與元九書」の説明をほぼそのままに全面的に採用し、その考察の出発点として依據して来られたように見受けられる。

然るに、ここには一つの問題がある。即ち、この「與元九書」に見える四分類の規定が、たとえ白氏本人の言であるとしても、それが実際の作品分類の段階に於いて一体どの程度まで有効性を持っていたのか、つまり、この規定と実際の分類との間には全く相矛盾するところは無いのかという点である。

言は意を尽くさず、という。思うに、多くの藝術家がそうである様に、理論と実践とは往々にして食い違うものであり、ここでも当然ながらその点に注意が払われて然るべきであろう。しかも、この四分類は単なる題材や形式からの類別でなく、詩の内容に深く関わつてのものである。更に考えを巡らせるならば、白氏は何故このようにしてまで自己の作品を分類する必要があるのか、何が一体彼をして自己の作品をこのように分けしめたのか、という根底的な疑問にも思い到るのである。しかし、これらのことに関して先の「與元九書」は何ら解答を示さない。一体我々は、かかる問題について、如何なる角度から如何なる理解をすれば良いのであろうか。

*

さて、四分類の内、雑律詩という分類のみは、先述の如く、今体詩（五言七言の律詩絶句）を意味し、唯一、詩の形態の上から機械的に區別されたものである。また、残る古体詩（主として五言古詩）三分類の内、第一番の諷諭詩というのも、詩経の伝統に則り、社会の悪弊や矛盾に鋭く迫ろうというものであり、これも内容上比較的容易に分別出来るものであろう。従つて本稿では、特に残る閑適・感傷二分類の區別に問題の的を絞つて考えてゆくことと

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

したい。

先の「與元九書」の定義に従えば、閑適詩とは、一個の人間として自由自適の心境をうたうもの。感傷詩とは、則ち同じく個人的詠懐を主としながらも、自適の心境とは無関係に、物事の一時の外発的衝動に抛って作られた詩、と考えることが出来る。しかし今実際に双方の個々の作品について見比べてみると、そこには往々にしてかかる定義では説明し尽くせぬもの、更には、却って全く相矛盾するのではないかとさえ思われるものが存在することに気がされるのである。

新裁竹 新たに裁多し竹

佐邑意不適 佐邑 意に適せず

閉門秋草生 門を閉じ 秋草生ず

何以娛野性 何を以てか野性を娛しましめん

種竹百餘莖 竹を種う 百餘莖

見此溪上色 此に溪上の色を見れば

憶得山中情 山中の情を憶ひ得たり

有時公事暇 時有りて 公事の暇に

盡日繞欄行 尽日 欄を繞りて行く

勿言根未固 言ふ勿れ 根未だ固からずと

勿言陰未成 言ふ勿れ 陰未だ成らずと

已覺庭宇内 已に覚ゆ 庭宇の内

稍稍有餘清 稍稍として 餘清有るを

最愛近窻臥 最も愛す 窓に近づきて臥し

秋風枝有聲 秋風 枝に声有るを

(〇三九五、卷九、感傷、整屋県尉時作)

この詩は、元和元年（八〇六）整屋県尉赴任中の作。自宅の庭に植えられた竹叢に題してのものである。分類上、この詩は感傷詩に属している。しかし、第七句「有時公事暇」とある如く、この詩の内容は全く以て閑適詩として相応しい内容のものである。

また、次も同じく感傷詩中の一首である。

禁中月 禁中の月

海上明月出 海上に明月出で

禁中清夜長 禁中 清夜長し

東南樓殿白 東南に 樓殿白く

稍稍上宮牆 稍稍として宮牆に上る

淨落金塘水 淨落す 金塘の水

明浮玉砌霜 明浮す 玉砌の霜

不比人間見 比せず 人間に見ゆる

塵土汚清光 塵土の清光を汚すに

（〇四〇一、卷九、感傷、翰林学士時作）

翰林学士として宮中に宿直する白居易は、そこより仰ぎ見る月光に、俗世を離れた一種の清らかさを認めている。これも、内容としては正しく閑適に属するものと言えよう。因みに、清儒何焯（義門）は、この詩について「此の篇何を以てか感傷に在る、更に宜しく参取すべし。」と評する。彼もまたこの詩が感傷詩として分類されていることに疑問を懐いたのである。

一方、閑適詩の側も問題無しとは言えない。次の詩は弟白行簡の息子阿龜と、白氏自身の娘羅兒とを歌ったものである。

弄龜羅 龜・羅を弄す

有姪始六歳 姪有り 始めて六歳

白居易における詩集四分類についての一考察（静水）

字之爲阿龜 之れに字して 阿龜と爲す

有女生三年 女有り 生まれて三年

其名曰羅兒 其の名をば 羅兒と曰ふ

一始學笑語 一は始めて笑語を学び

一能誦歌詩 一は能く歌詩を誦んず

朝戲抱我足 朝に戯れて 我が足を抱き

夜眠枕我衣 夜に眠りて 我が衣を枕とす

汝生何其晚 汝生まるること 何ぞ其れ晚きや

我年行已衰 我が年 行く已に衰へなんとす

物情少可念 物情 少くして念ふべく

人意老多慈 人意 老いて多く慈し

酒美竟須壞 酒美きも 竟には須らく壞ゆるべし

月圓終有虧 月円かなるも 終には虧くる有らん

亦如恩愛縁 亦た 恩愛の縁の

乃是憂惱資 乃ち是れ 憂惱の資なるが如し

舉世同此累 世を挙げて 此の累ひを同にす

吾安能去之 吾れ 安んぞ能く之れを去らん

(○三一二、卷七、閑適、江州司馬時作)

幼なき我が子への愛情は、人間誰しもが持つ感情である。とは言え、この詩の内容は正しく感傷に属するものである。周知の如く、感傷詩群中には、夭折した白氏の長女金鑾子への詩篇や、「觀兒戲」と題するこれと同趣向の詩も存在する。されば、この「弄龜羅」詩のみが何故閑適詩に分類されたのか、これは極めて不可解な問題となる筈である。

一体、この閑適・感傷兩詩群は、本當に「與元九書」に説明された通りに分けられているのであろうか。以上の諸例を見るに、私には、その「與元九書」に於ける白居易の規定そのものにも、強い疑問の念を懐かざるを得ないのである。

では、閑適・感傷兩詩群の眞の分岐点は那辺にあるのか。私はここで、先の「與元九書」の規定を一旦棚上げにし、兩詩群中に登場する人物、とりわけ白氏の詩友元稹について着目し、以下その把握検証に勉めたいと思うのである。

二

白居易にとって唯一無二の親友が元稹であり、同時にその文学の最大の理解者でもあったことは既に贅言を要しないが、特にこの詩集四分類について彼元稹が深く関係するのは、上掲四分類の説明が、そもそも彼への書簡文中に於いてなされたものであったこと、また、それと共に、その四分類の見える『白氏長慶集』五十卷こそが、長慶四年、最終的には彼の手で序文を付して編集されたものであったことに拠る。

実際のところ、その時の元稹の編集が、果たして如何なる程度にまで及ぶものであったかは定かでない¹¹。しかし、その作品配列を見るに、元稹に関わる作品がかなり特別な扱いを受けていることは確かである。例えば、諷諭詩群中に於いては「贈元稹¹²」と題する詩や「和答詩十首¹³」があり、閑適・感傷・雜律各卷頭（卷五・卷九・卷十二）に於いては、彼に關係する詩が、それぞれの開卷第一首を飾っているからである。従って、その閑適・感傷兩詩群中に於ける元稹に関する詩の収録状況は、或は、閑適・感傷双方のその最も本質的な部分を反映しているのではないかと推測され得るのである。

では、以下に、元稹に関する白居易詩についての調査結果について分析する。

【閑適詩中に見える元稹に関する詩】……四首

・常樂里閑居偶題十六韻、兼寄劉十五公興・王十一起・呂二良・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

張十五仲方。時爲校書郎（〇一七五、卷五〔卷頭〕、校書郎時作）

・效陶潛體詩十六首其七（〇二一九、卷五、渭村退居時作）

「：我有同心人、邈邈崔與錢。我有忘形友、迢迢李與元。或飛青雲上、或落江湖間。……」

・自吟拙什、因有所懷（〇二五六、卷六、渭村退居時作）

「：此外復誰愛、唯有元微之。趁向江陵府、三年作判司。相去二千里、詩成遠不知。……」

・昔與微之在朝日、同蓄休退之心、迨今十年、淪落老大、追尋前約、且結後期（〇三一六、卷七、江州司馬時作）

【感傷詩中に見える元稹に関する詩】……十九首

・西明寺牡丹花時憶元九（〇三九二、卷九〔卷頭〕、校書郎時作）

・權撰昭應、早秋書事、寄元拾遺、兼呈李司錄（〇三九四、卷九、整屋臬尉時作）

・別元九後詠懷（〇四〇四、卷九、翰林學士時作）

・寄元九（〇四〇七、卷九、翰林學士時作）

・春暮寄元九（〇四〇八、卷九、翰林學士時作）

・勸酒寄元九（〇四一六、卷九、翰林學士時作）

・立秋日曲江憶元九（〇四一九、卷九、翰林學士時作）

・初與元九別後、忽夢見之、及寤而書適至、兼寄桐花詩、悵然感懷、因以此寄（〇四二一、卷九、翰林學士時作）

・和元九悼往（〇四二二、卷九、翰林學士時作）

・感逝寄遠、寄通州元侍御、果州崔員外、澧州李舍人、鳳州李郎中（〇四四五、卷九、江州司馬時作）

・寄元九（〇四四九、卷十、渭村退居時作）

・寄元九（〇四六五、卷十、渭村退居時作）

・寄微之三首（〇四九四・〇四九五・〇四九六、卷十、江州司馬左遷途次作）

・春晚寄微之（〇五〇三、卷十、江州司馬時作）

・感秋懷微之（〇五一四、卷十、江州司馬時作）

・夢與李七、庾三十二、同訪元九（〇五二二、卷十、江州司馬時作）

・山石榴、寄元九（〇五九三、卷十二、江州司馬時作）

一目にして瞭然とする様に、双方にはその数量に於いての圧倒的な格差がある。即ち、感傷詩では合わせて十九首を数えたその作品数が、閑適詩では四首。しかも、その四首の内詩題に元稹の名が見えるのは、僅かに二首を数えるに過ぎないのである。

閑適・感傷という双方の名称を考えるに、親友元稹への篤き友情の詩が、感傷詩の側により多く見られるのは、或は当然のことかもしれない。しかし、作者白居易にとつて、その文学の最大の理解者である筈の元稹への詩が、諷諭詩と共に上位に置かれるべき閑適詩にかくも少なく、他方、雑律詩と共に評価の低い（先の「與元九書」の言を借りれば「略しても可なる」）感傷詩に多く見られるという事実は、我々に少しく意外な印象を与える。然るに、ここで更に注目されるのは、双方の質的な格差である。

感傷詩群中に見える元稹に関する詩は、次に一例を示す如く、相手を真正面に見据え、言わば双方が対話しているようにその内容が展開されている。

西明寺牡丹花時憶元九

西明寺の牡丹の花の時 元九を憶ふ

前年題名處 前年 題名せし処

今日看花來 今日 花を看に來たる

一作芸香吏 一たび芸香の吏となり

三見牡丹開 三たび牡丹の開くを見ゆ

豈獨花堪惜 豈に独り花の惜しむに堪ふるのみならんや

方知老暗催 方を知る 老いの暗に催すを

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

何況尋花伴 何ぞ況んや 花を尋ねし伴（元稹）の

東都去未迴 東都に去りて未だ迴らざるを

詎知紅芳側 詎んぞ知らん 紅芳の側

春盡思悠悠 春尽きて 思ひ悠なる哉

しかし、閑適詩四首の内、「常案里閑居偶題」詩を除く他の三作品は、いずれも、彼元稹への対話をというよりは、何がしかへ第三者を意識した、言わば紹介文的な口調を強く有しているように思われる。これは、過ぎゆく春に二人の心情を唯「思悠悠」としてまとめた先の感傷詩の場合と、その方法を全く異にするものである。

效陶潜體詩十六首 其七

陶潜の体に效ふ詩十六首 其の七

中秋三五夜 中秋 三五の夜

明月在前軒 明月 前軒に在り

臨觴忽不飲 觴に臨み 忽として飲まざるは

憶我平生歡 我が平生の歡を憶へばなり

我有同心人 我に同心の人有り

邈邈崔與錢 邈邈たる崔（羣）と錢（徽）

我有忘形友 我に忘形の友有り

迢迢李與元 迢迢たる李（紳）と元（稹）

或飛青雲上 或は飛ぶ 青雲の上

或落江湖間 或は落つ 江湖の間

（以下略）

白居易の閑適詩がかかる表現になる理由を考えるに、一つには、それらの詩の題に「贈元九」或は「寄微之」といった直接相手を指す言葉が無いことも大いに関係しよう。しかしながら、こうしたへ第三者を意識した口調は、

この閑適詩全体の本質をも如実に反映しているように思われる。即ち、この点に閑聯して更に思いあわされるのが、残る「常樂里閑居偶題」の詩である。

常樂里閑居偶題十六韻、兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二炁・呂四穎・崔十八玄亮・元九禎・劉三十二敦質・張十五仲方。時爲校書郎

常樂里閑居偶題十六韻、兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二炁・呂四穎・崔十八玄亮・元九禎・劉三十
二敦質・張十五仲方に寄す。時に校書郎たり

帝都名利場 帝都は名利の場

鷄鳴無安居 鷄鳴 安居無し

獨有懶慢者 獨り有り 懶慢の者

日高頭未梳 日高きも 頭未だ梳らしげず

工拙性不同 工拙 性同じからず

進退迹遂殊 進退 迹遂に殊ことなる

幸逢太平代 幸ひに太平の代に逢ひ

天子好文儒 天子 文儒を好めば

小才難大用 小才 大用に難きも

典校在秘書 典校して 秘書に在り

三旬兩入省 三旬に 兩はつか省に入り

因得養頑疏 因りて頑疏を養ふを得たり

茅屋四五間 茅屋 四五間

一馬二僕夫 一馬 二僕夫

俸錢萬六千 俸錢は万六千

月給亦有餘 月つき々々に給ふも 亦た餘り有り

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

既無衣食牽 既に衣食の牽無く

亦少人事拘 亦た人事の拘せらるること少し

遂使少年心 遂に少年の心をして

日日常晏如 日日 常に晏如たらしむ

勿言無知己 言ふ勿れ 知己無しと

躁靜各有徒 躁靜 各々徒有り

蘭臺七八人 蘭台の七八人

出處與之俱 出處 之れと俱にす

旬時阻談笑 旬時 談笑を阻つれば

旦夕望軒車 旦夕 軒車を望む

誰能讎校間 誰か能く讎校の間に

解帶臥吾廬 帯を解きて 吾が廬に臥せん

窓前有竹玩 窓前に 竹玩有り

門外有酒沽 門外に 酒沽有り

何以待君子 何を以てか君子を待へん

數竿對一壺 數竿に 一壺を対す

詩中、元稹は直接に登場することはせず、あくまでも白氏の一同僚（校書郎）として詩題中にその名が見えるだけである。しかし私はここで、この詩が一度に八人もの、しかも彼の職務上の同僚達に寄せられた詩でること注目したい。即ちこれは、先の〈第三者を意識〉した元稹に関する詩篇の存在と微妙に繋がりを持つ。つまり、これら閑適詩としてまとめられた一群は、本来、この巻頭の詩に見られるように、彼の職務上の上司や同僚達に広く自己の作品を公開することを目的として編集されているのではないか、と考えられるからである。例えば、この閑適詩の第一卷（巻五）内のその他の詩を見て、

・首夏同諸校正遊開元觀、因宿玩月（〇一七八）

・冬夜與錢員外同直禁中（〇一九一）

・和錢員外禁中夙興見示（〇一九二）

・夏日獨直、寄蕭侍御（〇一九三）

といったように、やはり同僚達との唱和の詩、また、禁中に於いて（公務の餘暇）として詠み合わされたと思しき詩篇を数多く見出すことができる¹⁵。察するに、当時白居易は、職務上の、所謂付き合いの詩と、親しい友人達とのざつぐばらんな場面での詩とを明確に区別したのであって、抛って、かかる詩歌群をそれぞれ閑適・感傷として名付け分類したのではなかっただろうか。

人にはそれぞれ公的な時間と私的な時間とがある。また、公的な時間の中でも、緊張の持続が要求される実質上の職務の時間と、それが緩和される餘暇のひとときがある筈である。特に、校書郎となつて以来、一官吏として宮中に出仕した白居易にとつて、かかる三つの時間は、各々かなりの懸隔を持つて彼自身の中に迎え入れられていたことであろう。而して諷論・閑適・感傷という三分類は、そのそれぞれの場面に巧みに連繫するように思われるのである。即ち、天子の上覧に供するような場合、その内容は、詩経の伝統に則した「諷論」¹⁶であるべきであり、公務の餘暇に、広く己が同僚達に見せ合う詩としては、自己の名利を一切口にしない「閑適」が相応しく、また、親しい友人同士の間柄では、情愛深い「感傷」が、そのテーマとして選ばれて然るべきだと考えられるのである。白居易は、実にこのような考え方の下に、自己の作品を分類していた、或は、分類する必要があったのではなかったか。私には、かく思われるのである。

三

さて、閑適・感傷双方に分類される詩を更に幅広く涉獵してゆくに、やはりこれらを、先述の如く公と私、或は、公務の餘暇としての私と完全な私といった区別の下に分け得る例を、我々は他にも幾つか見つけ出すことができる。

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

聞早鶯 早鶯を聞く

日出眠未起 日出でて 眠りて未だ起きず

屋頭聞早鶯 屋頭に 早鶯を聞く

忽如上林曉 忽として上林の曉の

萬年枝上鳴 萬年の枝上に鳴けるが如し

憶爲近臣時 憶ふらくは 近臣たりし時

秉筆直承明 筆を乗りて 承明まことに直せしを

春深視草暇 春深く 草したかきを視るの暇

旦暮聞此聲 旦暮に 此の声を聞けり

今聞在何處 今聞くは 何れの処にか在る

寂寞潯陽城 寂寞たる 潯陽の城

鳥聲信如一 鳥声は 信に一の如きも

分別在人情 分別 人情に在り

不作天涯意 天涯の意を作さざれば

豈殊禁中聽 豈に禁中に聴くに殊ならんや

(○二九五、卷七、閑適、江州司馬時作)

これは閑適詩に属している。元和十二年(八一七)白氏江州司馬左遷中のものである。謫居のある朝、ふと鶯の声を耳にした彼は、翰林学士として天子の側近く仕えた頃を回想する。しかし彼は「鳥の声は何処も同じ、その違いは己が心の内にこそ起因するのだ」として、その思いを強く戒めて一首を結んでいるのである。

しかし、同じ江州時代の作であっても、これが感傷詩に収められるものとなると、その表現は全く相異つたものとなる。

早蟬

早蟬

六月初七日 六月 初七日

江頭蟬始鳴 江頭に 蟬始めて鳴く

石楠深葉裏 石楠 深葉の裏

薄暮兩三聲 薄暮 兩三の聲

一催衰鬢色 一には催す 衰鬢の色

再動故園情 再びは動す 故園の情

西風殊未起 西風 殊に未だ起こらざるに

秋思先秋生 秋思 秋に先んじて生ず

憶昔在東掖 憶昔 東掖に在りしとき

宮槐花下聽 宮槐 花下に聴けり

今朝無限思 今朝 無限の思ひ

雲樹遶溢城 雲樹 溢城を遶らん

(〇五一〇、卷十、感傷、江州司馬時作)

この詩に於ける白氏は、夕方の蟬の聲に、実に素直にその貶謫の悲しみを搔き立てている。もとより、この二首の間には、春と夏、早朝と夕暮れという時間的な差、また、鶯と蟬という題材の差があり、それらによる状況の変化が、白氏自身の内面にも微妙な影を落としているのであろう。しかし、これら同時期（共に元和十二年作）の、しかもその趣きを殆ど一にする兩詩を、一方を閑適に、他方を感傷にと分別する意識には、仕事上の仲間等、言わば誰に読まれても構わない詩と、我が苦悩の胸中を理解してくれる友にのみ見せるべき詩、といった区別が彼自身の中に自ずと働いていたはずではないだろうか。

更に、一例を挙げる。

早朝賀雪、寄陳山人

早朝して雪を賀し、陳山人に寄す

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

長安盈尺雪 長安 尺に盈つる雪

早朝賀君喜 早朝して 君の喜ぶを賀す

將赴銀臺門 將に銀台門に赴かんとして

始出新昌里 始ら新昌里を出づ

上堤馬蹄滑 堤に上りて 馬蹄滑り

中路蠟燭死 路に中りて 蠟燭死ゆ

十里向北行 十里 北に向かひて行かば

寒風吹破耳 寒風 耳を吹き破らんとす

待漏五門外 待漏 五門の外

候對三殿裏 候對 三殿の裏

鬚鬢凍生冰 鬚鬢 凍りて氷を生じ

衣裳冷如水 衣裳 冷えて水の如し

忽思仙遊谷 忽として思ふ 仙遊谷

暗謝陳居士 暗謝す 陳居士

暖覆褐裘眠 暖かに褐裘を覆りて眠り

日高應未起 日高きも応に未だ起きざるべし

(〇四二〇、卷九、感傷、翰林學士時作)

これは、早朝朝賀の出勤途上の詩。特にその第五句以後は、雪の日の辛苦を実にリアルに描き、最後に、こうした苦勞を知らぬ陳山人の安穩な暮らしに「暗」に羨望の氣持ちを表しているのである。かかる詩と前章の「常楽里閑居偶題」詩とを比べ見るに、我々はその内容が全く別人のように違うことに氣付かされるであろう。即ち、自己の官吏としての他位に謙遜と満足の意とを以て詠み綴った先の「常楽里閑居偶題」詩と、出仕の苦勞を率直に吐露するこの感傷詩とは、その内容に於いて全く相容れぬものを持っているのである。想像するに、かかる両詩は、本来

別々の巻帙に収められ、その公開の場所や相手にも、自ずから明確な区別制限があったのではないだろうか。この「早朝賀雪」詩は、仙遊人の隠者に見せることは許されても、宮廷内に於いて、天子に仕える一員として公開することは、やはり差し控えるべき内容のものだと思われるのである。

感傷詩内には、更に次のような詩もある。

思歸。時初爲校書郎

帰を思ふ。時に初めて校書郎たり

養無晨昏膳 養に 晨昏の膳無く

隱無伏臘資 隱に 伏臘の資無し

遂求及親祿 遂に及親の祿を求め

僦俛來京師 僦俛して京師に来たる

薄俸未及親 薄俸 未だ親に及ばず

別家已經時 別家 已に時を経たり

冬積温席戀 冬には積る 温席の恋

春違採蘭期 春には違ふ 採蘭の期

夏至一陰生 夏至りて一陰生じ

稍稍夕漏遲 稍稍 夕漏遅し

塊然抱愁者 塊然として愁ひを抱く者は

夜長獨先知 夜の長きを独り先ず知りぬ

悠悠鄉關路 悠悠たる郷関の路

夢去身不隨 夢去るも 身は随はず

坐惜時節變 坐ろに惜しむ 時節変はり

蟬鳴槐花枝 蟬は鳴く 槐花の枝

白居易における詩集四分類についての一考察（静永）

(〇四二七、卷九、感傷、校書郎時作)

この詩は「時初爲校書郎」の自注に示される通り、奇しくも前章「常楽里閑居偶題」詩と時期を相同じくする。しかし、この詩に於いて注意されたいのは、彼は、この詩の中では、校書郎の役職について全く不満足の間意を表していることである。特に、その俸給に関しては、第五句「薄俸未及親」として、その少なさを歎いている。これは明らかに常楽里の詩の「俸錢萬六千、月給亦有餘」と相矛盾する言いぐさである。

思うに、「思歸」と題するこの詩は、「常楽里閑居偶題」詩と同時期の作であるとしても、その制作当初より全く別な詩巻に書き留められ、その公開の場所や相手にも自ずと制限があったのではなからうか。公務の餘暇に、仕事上の同僚達に広く公開する場合と、私邸に戻り、気心の通い合った仲間だけにだけ見せる場合（そこには当然元稹がいたであろう）とは、本来その零田気にも違いがあった筈である。だとすれば、閑適詩と感傷詩とでその内容が一八〇度逆になったとしても、それは一向に差し支えるものではなく、従って、各詩巻に区別が生じることも、或は至極当然なこととも考えられるのである。諷諭・閑適・感傷という分類は、実にこのような形で、詩の情趣とは殆ど無関係に成立していったものではないだろうか。

四

元和五年（八一〇）、洛陽の監察御史であった元稹が、突如江陵に左遷されるという事件が起こった。その時の事について、白氏は次のような回想の文章を残している。

五年春、微之東臺より來たり、日を數えずして、又江陵士曹の掾に左轉せらる。……是の夕、足下山北の寺に次るも、僕職役ありて去くを得ず、季弟（白行簡）に命じて行を送らしめ、且つ新詩一軸を奉じ、執事に致す。凡て二十章、率ね興比有り、淫文豔韻、一字として無し焉。……足下の江陵に到るに及び、路に在りて爲る所の詩十七章、凡そ五六千言を寄す。言に爲有り、章に旨有り、宮律の體裁に追ぶまで、皆作者の風を得たり。緘を發き卷を開くに、且つは喜び且つは怪しむ。僕牛僧孺の戒めを思ひ、他人に示す能はず。唯だ杓直

(一李建)・拒非(一李復禮)・及び樊宗師の輩三四人と與よに。時に一吟讀して、心に甚だ貴び重んず。：

(和答詩序、〇一〇〇、卷二、諷論、翰林學士時作)

さてこの一文は、本稿の考察に關して幾つかの重要な示唆を与えてくれるように思われる。即ち、まず第一点は、當時白居易は、元稹への餞別としてこれを贈った如く、日頃より十首二十首の單位で新作の詩篇を卷軸に収め、時にその自作の一部分を公開する機会があったということ。また第二点は、かかる習慣は、元稹がその返札として十七首の詩卷を送り寄せた如く、當時の文人間にあつて、ほぼ一般化しつつあつたのではないかということ。そして更に第三点としては、その元稹の詩卷に對し、白氏が「牛僧孺之戒」^立を思い、友人三四人の間でしか公開しなかつたと言ふ如く、それらの詩卷は、時として公開する相手を吟味し制限する場合があつたということである。従つて、これらのことより察するに、白居易は、元和十年の『詩集』十五卷の編集以前にも、既に小規模ながら詩集の編集を開始し、それらの詩卷は、彼の一官吏としての微妙な立場を反映し、幾つかの(最終的には四項目の)区分けがなされていたと考えられるのである。

當時、詩文集を印刷するという考え方は、まだ無い。それらの伝播は、全て人から人への筆写および口誦に拠るしかないのである。されば、それらの卷軸は、自然、公開の場所や人数にも制限が加わつた筈である。また、卷子本の形状を想起するに、それぞれの詩稿は、同じ系列のもの同士次々と継ぎ足され、或は書き加えられ、一卷の、整つた分量の卷軸にすることが可能である。白居易の詩集は、やはり、元和十年の時点に於いてはじめて分類され成立したのではなく、既にそれ以前から、(1)天子に奉るべき正統な詩歌群、(2)宮中の同僚達に見せるべきやや打ちとけたもの、(3)元稹ら数人の親族友人間の思い出の詩集、そして(4)五言七言の今体詩、といった区分が存在し、元和十年に於いては、そのそれぞれに諷論・閑適・感傷・雜律との名称が付けられただけだと推定せられるのである。

「與元九書」において白氏は閑適詩を次のように説明した。
或は公より退きて獨り處り、或は病を移げて閑居し、足をを知り和を保ち、情性を吟詠せし者、一百首、之れを閑適詩と謂ふ。

また、感傷および雜律詩については、次のような説明があつた。

白居易における詩集四分類についての一考察(静水)

但だ親朋合散の際を以て、其の恨みを釋き懼びを佐くるに取る。

従来、これら詩集四分類についての検討は、冒頭にも述べた如く、先ず「與元九書」の読解に始まり、然る後各名称の由来および収録作品の分析へと傾向にあったように思われる。しかし、これら閑適・感傷兩詩群の眞の分岐点を探るに、それらは自由自適、或は、一時の喜怒哀樂等、各作品の情趣の違いにあるのではなく、上記引用文中に見ゆる如く、「退公独処」、「移病閑居」および「親朋合散之際」という、作詩時の白氏の立場情況の違いにこそ存在するのだと考えられるのである。

中央のエリート・コースを歩む元和初年当時の白居易にとって、自己の置かれた立場によつてその詩の内容を変えることは、蓋し、一官吏としての、言わば必須の条件だったのではなからうか。されば、江州左遷以後、四分類に変化（諷諭詩がなくなる）が生じ、更に太和二年の『後集』に於いて、その分類そのものが採用されなくなったことも、ことさらに中央政界に背を向け続けた彼の後半生と相俟つて、或は必然的な帰結であつた、と考えられるのである。⁽¹⁹⁾

（一九九一年九月二〇日、在杭州）

注

(1) 本稿は四部叢刊初編所収那波道圓翻宋本『白氏長慶集』を底本とし、適宜諸本を参照した。また作品番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』に、作品繫年は朱金城氏『白居易集箋校』にそれぞれ基づいた。

(2) 白氏にはこの他に、元稹や劉禹錫との唱和集等があり、このことは白氏自ら記す「白氏集後記」（巻七一、会昌五年作）に詳しい。

(3) この詩集の存在は「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」詩（巻十六、雜律、元和十年作）によつて判明する。

(4) 本稿では那波本『白氏長慶集』の前半五十巻を以てこの詩文集の形態を考へることとする。

(5) 注(4)の那波本には現在一三九九首の詩歌が収められている。しかし、卷二十の卷末「李徳裕相公貶崖州三首」は、明らかに後世の偽作の混入であると考えられ、本稿ではこれを省く。

(6) ただし、白氏以前、既に元稹によって詩集十分類が考案されており、その影響が考えられるが、その各分類項目の内容については、両者の関係は極めて薄弱だと思われる。これについては成田静香氏「『白氏長慶集』の四分類の成立とその意味」(集刊東洋学六一号・一九八九・五月)を参照。

(7) 孟子・盡心上「窮則獨善其身、達則兼善天下。」また風俗通義・十反に「孟軻亦以爲、達則兼濟天下、窮則獨善其身。」とある。

(8) 北京図書館蔵失名臨何焯校一隅草堂刊本『白香山詩集』に拠る。ただし筆者は該書を未だ実見していないため、本稿では朱金城氏『白居易集箋校』に引かれるものをそのまま引用した。

(9) 「金鑿子晬日」(〇四一三、卷九)

(10) 「念金鑿子二首」(〇四六八・〇四六九、卷十)

(11) 思うに、その実質的な編集作業については、やはり白氏本人に拠るところが大きいであろう。例えば、その詩集四分類の考え方もそもそも白氏独自のものであるし、また、文集中随处に付される作品の制作年に関する自注は、白氏本人によって記されるべき内容のものであると考えられるからである。

(12) 〇〇一五、卷一。

(13) 〇一〇〇〇一〇一〇、卷二。

(14) 「常樂里閑居偶題十六韻、兼寄劉十五公興・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方。時爲校書郎」(〇一七五、卷五、閑適)

「西明寺牡丹花時憶元九」(〇三九二、卷九、感傷)

「代書詩一百韻寄微之」(〇六〇八、卷十三、雜律)

(15) 因みに、前章に掲げた「弄龜羅」詩も、その口吻は第三者への紹介文的な調子を持っていた。

白居易における詩集四分類についての一考察(静永)

(16) 本稿では諷論詩の意味内容について、その考察を欠いたが、これについては、只今別稿を用意中であるので、ここでは私見を述べるとどめたい。

(17) 元和三年(八〇八)四月の賢良方正直言極諫科に於いて、牛僧孺らが時政を厳しく批判した答案を提出し及第したことによって起きた事件。『舊唐書』卷一五八韋貫之伝・同卷一七六李宗閔伝および『資治通鑑』卷二三七等に詳しい。

(18) 元和十年以前の白氏の詩集編纂の実例は、他の資料にも散見され、例えば「與元九書」中にも「及授校書郎時、已盈三四百首。或は出示交友、如足下輩、見皆謂之工、其實未窺作者之域耳。」とある。

(19) 本稿では詩集四分類の成立について、これを中心に考察し、その消滅については考察が及ばなかった。また、本稿の四分類の解釈がほぼ妥当なものであるとすれば、では一体、白氏は何故かくも系統の異なる四種の詩歌群を一つの詩集に合わせたのか、という疑問にも思い到る。これらの点に関しては、江州左遷以後の白氏の心情の考察と併わせ、後日、稿を改めて考えたい。